

火の路① 松本清張



文春文庫



文春文庫

定価はカバーに表示してあります

火の路(上)

106-29

1978年7月25日 第1刷

著者 松本清張

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

文春文庫

火 の 路
(上)

松本清張



文藝春秋

目次

酒の石	7
奈良の町	34
骨董店付近	58
古都の殺傷	81
幻覚	105
海津茅堂	127
酒場談議	151
不接続	175
石の論考	200
かくれた波	227
河内の盗掘人	254
影の暗示	277
夜・東海道	302
西教の火	336
準備	359
星夜	384

火
の
路
上

酒の石

明日香村の中心になっている町なみから南に行くと、人家の集まりがしばらく途切れてのち、岡の小さな商店街に入る。戸籍のように正統に言えば奈良県高市郡明日香村岡だが、岡寺のあるところとして通りがいい。

そこまでの舗装路は以前のままの県道だから東側の丘陵の線に沿ってゆるやかな屈折がある。西側は田畑になっている。

ひろい丘陵にも田にもまだ冬の色が残っていたが、晴れた午後、かなり強くなってきた陽ざしにそれがぬくめられていた。田は鋤き返されたままの粘りのある黒い土を見せ、畑には短い麦が青い色を伸ばしかけていた。

が、ひろびろとした風景には緑が少なく、主調は黄色と茶褐色、丘陵の雑木林は裸の梢の群れ、幹にからみついたツタカズラも枯れたままで落葉のつもる下草にずりさがっている。田圃の木立もわびしいが、道から見える孤立した林に梅が白くのぞいていた。

梅だけは満開だった。農家の垣根の中にも、寺の塀の内側にもそれがある。くすんだ百姓家の屋根を背景にしてみると、枝に雪を置いたように見えるのだが、大和に多い白壁が後ろだと花の

様子が分からない。げんに松林の中に咲いている一本の梅も、せっかくのことながら寺の細長い白塀のために目立たずにいた。その寺が川原寺だった。

川原宮、岡本宮、浄御原宮、板蓋宮と、この道のどこかの位置にたたずむと、それらの旧址を眺望して身はひとりで「飛鳥の古代」に包まれるしくみになっている。田圃の向こうには、これも冬枯れがまだ残っている甘藷丘あまかしのおかが見える。川原寺とは反対の北側には飛鳥寺の屋根が高い。飛鳥川が甘藷丘の裾から香久山の方へ流れているが、低いので平地からは水が見えない。

道路には観光バスが通った。運転台の横にはマイクを口の前に添えたガイドさんが白い手袋を挙げていた。乗客の顔がどの窓からも一斉に田圃の向こうを眺めていた。なかにはバスを除けて道のわきに待っている小さな、よごれた車を見おろす顔もあった。

「どんなふうの説明しているんだろうな、要ちゃん？」

と、その小さな車の中の男が、通り過ぎたバスを見送って言った。

その瘦せぎすな男はコートの前衿に瀟洒な柄のネクタイをのぞかせた三十四、五くらいのきちんとした支度だが、要ちゃんと呼ばれた横の男はそれより少し年下で、髪が長く、黒の革ジャンパーを着込み、無精髭を伸ばしていた。うつむいてカメラのレンズをまわしながら、

「さあ。飛ぶ鳥の明日香の里を置いていなば君があたりは見えずかもあらむ……そんな歌をませで話しているんじゃないですか」

と、低い声でいった。

「うまいね。よく覚えたものだ」

うまいね、と伴れが万葉集を口ずさむのをほめたのは雑誌の編集者で、いま、車の助手台に坐っている明日香村役場の観光課主任にさきほど渡した名刺には、雑誌『文化領域』の副編集長福

原庄三と刷りこんであつた。

カメラをいじっている革ジャンパーの男が渡した名刺のほうには「坂根要助」とあつてべつに肩書はなく、東京の住所の横に或る写真家連盟の小さな活字がならんでいた。座席の横にも足もとにもカメラの道具函だの三脚だのがいっぱい置いてあつた。

「要ちゃん、観光バスに乗ったことがあるの？」

福原副編集長が煙草の煙に眼をすぼめてきいた。

「いや。ないです。いっぺん乗ってみたいと思つてますがね」

写真家はカメラからレンズをはずして別のと取りかえながら、

「バスガイドというのは、実にいろんな歌をとり入れていますからね、想像でそう言つただけです。もう一つ言うと、この丘の裏に倉椅山くらいざやまが見えるから、それで、ええと、倉椅山をさがしみると……」

と、詰っていると、助手台に坐っている中年の観光課主任が前から、

「はしたての倉椅山を嶮あぶらしみと岩かきかねて我が手取らすも……ですな」

と笑つて言った。

「そうでした」

写真家が長い髪を振つた。

「杉井さん。それも万葉集ですか？」

福原が観光課主任の背中にきいた。というよりはうすくなくなった後頭部に質問していた。

「いや、古事記にある歌です。肥前国風土記にも同じような歌があつて、たぶん歌垣の際の歌謡やろうということですが、そんなせんさくよりも死の悲恋逃亡行の歌と素直にうけとつたほうが

ロマンチックな若い人の心を打ちますやろな」

副編集長は教えられて車の窓から窮屈げに倉崎山を仰いだ。春にはまだ遠い色が急な斜面をうそ寒く蔽っていた。

「ははあ。古事記と万葉集と、この里を訪れる者は古代の息吹きに窒息しそうなくらい感激するでしょうね？」

福原が顔を杉井主任の後頭部に戻した。

「好きな人はそうですね。眼に見える一木一草が飛鳥時代のままやと思うて涙を流されますよ。女性などは文庫本の万葉集などを片手に持って歩いてはります。年輩の方も、若いころは和辻哲郎さんの『古寺巡礼』などを持ってこのへんや奈良の寺まわりをしましたもんやいうてはる人が非常に多いですな。飛鳥の古代にあこがれる人もよけい来やはりますけど、遺蹟にも寺にもろくに眼もくれずに車で走り回るだけの無関心組も多うおますわ。排気ガスと紙屑ばかり撒き散らされて弱りますねん」

役場の吏員は笑ってなげいた。

乗り捨てた車が丘の下に陽をにぶく反射していた。

県道わきの狭い空地で、車の横に「史蹟・酒船石」の立札があった。あたりは畑地で、野菜の葉が短い。その中に細い小径がついてこの丘に人を誘導するようになっていた。丘の斜面にも低い谷にも葉を落としたままでまだ芽の出ない雑木林が屑のように群れていた。

丘陵は下の県道から見上げて二十メートルくらいはありそうだった。ほかの丘陵のつづきだが、その先端なので独立した丘のように見える。

小径の枯葉を踏みながら先頭に案内役の役場の杉井主任、福原副編集長、坂根カメラマンがつ

づいた。福原庄三は長身で、坂根要助は普通より少し背が低い。ならばと高低が目立った。福原は痩せ、坂根は肩幅が広く、箱のような感じの、がっちりとした身体つきだった。坂根はカメラ道具を入れた金属性の函を革紐でひろい肩に載せ、手に長い三脚を持った。函が坂根の尻の上で重そうに揺れる。福原がカメラ二台をぶらさげているのは、坂根の手伝いであった。

小径を上りながら、副編集長が前を歩む、役場の観光課主任に話しかけている。

「杉井さん。さっきのお話ですが。いや、遺蹟に無関心組が車で走ってきて排気ガスと紙屑とを撒き散らすということですがね。その手合はだんだんふえていくんですか？」

「ふえましたとも。高松塚ブーム以来激増ですわ。一種の流行ですが、この流行が落ちついたときが、若い人にはほんまの古代飛鳥が定着するんでっしゃろな」

「まあ、しかし、古代を想うということだけでロマンがありますからね。雑誌も古代や万葉集を特集すると売れ行きがいいんです。ですが、記事だけでは駄目ですな。ロマンチックな雰囲気の出ているカラー写真をふんだんに入れんことにはね。……だから、わたしどもとしては、腕のいいカメラマンを指定して頼んでいるんですよ」

最後の言葉は、背後から重い函をかついで登ってくる写真家に、煽動的な激励であった。なにごとくも商売である。副編集長は雑誌の写真ページの青任者だった。坂根要助はそんな言葉よりも足もとが大事だというように下を見つめて歩いている。小径の坂は上で急になり、ところどころ崩れかけていた。

「きました。これです」

頂上に達して立ちどまった杉井が手を水平にあげ、あとから来る二人に示した。

巨きな石が平地にすわっていた。厚さを見せたところが一メートルくらいの高さで、上部は細

長い扁平だった。長さ五メートル、幅二メートルというのが目測で、上の平らな面には、楕円形の浅い穴が二つ、きちんとならんでいた。これがまず目立った。

「まるで大きな手水石ちゆうすいしですな」

福原副編集長が風化で黒ずんだ巨石を眺め、役場の杉井主任に呟いた。

神社や寺の境内に置いてある手水用の石を思わせたのは、上の大きな平面に楕円形の穴がくり抜かれているからで、ほぼ一メートルの高さもそれと似合っている。周辺は自然石のかたちが残されているが、平面部は石工の手があまるところなく入っていた。

「けど、穴はいくつもありますよ。まず、中央部にタテにならんだ小判形の二つの大きな穴、それにならぶ半分くらいの穴、これは小判形を半分に切断したようなかたちですわな」

杉井は静かな笑みで、いちいち指さした。

「……この半円形の左右には、まんまるい小さな穴が二つついてます。石の両端が削ぎ取られているので、まるい穴も少し削げてますがね。また、小判形の斜め横には、もっと小さいまるい穴があります。それに、これらの穴と穴をつなぐ直線の細いミゾですが、そのミゾの行方は石の両端まで伸びてるでしょう。手水石の感じには似てるけど、まったく違いますやろ？」

福原は説明につれて視線を動かし、うなずいていた。坂根のほうは黄色い草の上に置いたジュラルミンのケースを開けてしゃがみ、撮影器具をひろげたり、三脚を組立てたりしてひとりで忙しがっていた。光った函にアリが這い上がろうとしている。

「なにしろ大きい」

福原は一步退るようにして、石の全体を眺めた。

「杉井さん、こっちにくるときのお話では、古代の酒造り石だといわれているということですが、



酒 船 石

ほんとうの用途は何でしょうか？ 想像でもいいんですが」

「まあ、あの立札を見てもらいましょか」

杉井に言われて、福原が石の傍に立っている立札の文句を読んだ。

「史蹟酒船石。——岡寺より飛鳥寺に至る東の丘陵上にある石造物で長さ約五・三メートル……俗に酒船石と呼ばれ、酒造石あるいは漕油石、辰砂（朱）の製造に用いた石などの説があるが明らかではない。昭和二年史蹟に指定された。——明日香村」

「漕油石」とはどういう意味か分からない。

福原の視線が文字から離れるのを見て、杉井が、

「わたしらのほうで、こないなことを書いておいたんですが、はっきりしたことはわからないというのが学問的な良心ですな」

と、微笑していた。

「この油というのは何ですか？」

「たぶん菜種油をこの穴でしばって溜め、ミソに流し、麓の集落に配給したんやないかという説です」

「辰砂は？」

「丹朱です。水銀と硫黄との化合物で、その鉱石をこの石の穴で砕いて朱を取ったという想像説ですな。丹朱は防蝕剤ですよってに、古墳時代には被葬者の棺などに入れてます」

カメラマンの用意ができた。

坂根カメラマンが石の巨体を撮りはじめた。三脚を高くし、石の平らな上部に大きなカメラを向けていた。

福原副編集長と杉井主任とはカメラの仕事の邪魔にならぬよう横に退っていたが、福原が接写レンズをつけたカメラの角度に気づき、

「要ちゃん、何を撮っているの？」

と傍から訊いた。

「アリです」

坂根がファインダーをのぞきピントを合わせながら答えた。

「アリ？」

「石の小判形の穴の底にアリが二匹這っているのを撮ろうと思うんです。ちょっと面白そうですから、先にこれからはじめます」

風でファインダーに乱れかかる髪の毛が邪魔そうだ。

福原はちょっと不服そうだったが、役場の杉井は珍しがって、

「やっぱりプロのカメラマンは眼の着けどころがちがいまん。古代の石の穴底を這ってるアリとはおもしろいです。それで無生物の石がぐっと生きますわ。それにカラーだとこの石が青っぽく出るやろから、黒いアリと対照的ですよな」

と坂根の思いつきをほめた。

「石の穴がわりかし浅いから、底を這っているアリがよく見えるんです」

坂根がそのままの姿勢で答えた。

「ウム。穴の底は浅いね。杉井さん。こんな底の浅い穴壺で醸造した酒が溜められたもんですかね？」

福原は仕方なさそうに穴の深さを問題にした。